

万葉のこころを今につないで

藤布(ふじふ)

遊絲舎(ゆうししゃ)

京都府京丹後市

日本全国染織探訪 北の風と南の海

北海道の最北端から沖縄本島まで約2400km。日本には、その土地土地に伝え継がれてきた「染め織り」を、今も守り続ける人がいる。そんな作り手たちを訪ねながら、東へ西へ北へ南へと日本をゆく探訪紀行。

172

万葉の時代から

日本海に地味に飛び出た京都府の丹後半島が、丹後ちりめんの産地であることや、「西陣織の工場」と呼ばれたことは、きものファンならよくご存じかもしれない。しかし、ここ丹後が雪国であることは案外知られていない。昨今の温暖化で雪は少なくなったものの、つい30~40年前までは屋根の高さまで雪が降り積もり家屋の二階から出入りをしたこともあつたそうだ。海が近いにもかかわらず雪深く木綿の栽培が困難だつたこともあって、ここ丹後では万葉集にも詠われた「藤布」が比較的に近年まで織

られていた。

須磨の海人の塩焼き衣の藤衣
なれはすれどもいやめづらしも

大君の塩焼く海人の藤衣
作者不詳 卷12 2971

藤の花は万葉集に20首以上詠まれてい

るが、藤布が詠まれているのはこの二首で、いずれも、最初はゴワゴワと肌に馴染みにくいが、慣れてくると大変具合の良い衣類であったことを詠っている。そして何よりも、太古の昔から私たちの身近にあつた布だと

いふことを証明している。
丹後半島の山間部ではこの布は「のの」と呼ばれて親しまれていた。従事者の高齢

化にともないその技術の伝承が風前の灯

火となり、「京都府立丹後郷土資料館」で「藤織り」の講習会が開催されたりして、一九八九年に「丹後藤布保存会」が発足し、その二年後には京都府の無形民俗文化財となる。その後「丹後藤布振興会」が設立され、二〇〇一年には「京都府伝統工芸品」の指定を受けた。その振興会を中心的な役割を果たしてきたのが、今回訪ねた小石原将夫さんだ。

小石原さんは機屋の四代目。明治の頃に曾祖父が「小石嘉ちりめん」の製造を始めた。父親からは「機織りを楽しめよ」と育てられたという。小石原さんは35年前に藤布の存在を知った小石原さんは織りの原点とも言える藤布にどんどん傾倒していく。藤織りをしていたお婆さんをみつけて直接織り方を指導していただいだりました。

「お婆さんは上手に出来るんですけど、その、自分が出来る仕事を、他人に言葉では伝えられないし、系統立てて教えてもらえないで理解をするのに苦労しました。質問をしても理由は分からんです。見よう見まねで習って、試行錯誤を繰り返しました」と笑いながら当時を振り返る。そして現在は、もともと得意だった絹織物と藤布の融合によって生まれるつややかで素朴な、そして軽くて締めやすいおしゃれな帯を作り続けている。

「あちこちの、藤を見に歩きましたよ。そして苗や、有名な古木の子供を貰つてきて庭にも植えていますし、『衣のまほろば藤の郷』という名前の畑にも植樹しました。

見えない力に導かれて

二〇〇九年に藤の郷がオープンする時は、京丹後の市長や京都府の振興局長、観光協会、商工会などの人たちや、地元の学校長達も駆けつけた。ちりめんが苦戦を強いられ、廃業や転業が続く中で、なんとかこの藤布を丹後の地場産業の一つにできないか? という地域ぐるみのチャレンジだった。「あしがフランパーク」って聞いたことがあるでしょう? そのあの、有名な大藤を移植してあそこまで育て上げた園長の塚本こなみさん、藤の植樹についてのアドバイスをいただいたり、式典では講演をしていただきました。古木や巨樹の保護や治療や移植の専門家なんですよ」と、藤の話になると小石原さんの話には力が入つてくる。藤が愛おしくて仕方がないのが表情からも一言ひとことの言葉からも伝わってくるのだ。

「工夫と努力の繰り返しで、少しづつ白くなしやかな糸を生み出せるようになつてくると、持ち前の創造力が俄然ものをいう。次々と生み出す帯は全国の百貨店はもとより、専門店でも扱われるようになつていつたのである。



「衣のまほろば藤の郷」までは小石原さんの家から徒歩で5分ほど。今年はさらに改良、充実させようと計画中。



■問い合わせ先:
京丹後市網野町下岡610
0772-72-2677
<https://www.fujifu.jp/>
文・写真／大下直子

藤布の伝道師として

一九九八年に小石原さんは「遊絲舎」を設立した。曾祖父の時代から続いてきた小石嘉織物をやめたわけではないが、「自分は藤布で生きていく」という小石原さんの決意表明ではなかつただろうか。

二年後の二〇〇〇年には「藤布あかり」を宮内庁でお買い上げいただく。そしてその翌年の二〇〇一年ついに「丹後藤布」として京都府の伝統的工芸品として指定を受けるのである。そこから藤布の大躍進が始まった。経済産業省近畿産業局長賞、農林水産省生産局長賞と各方面から高く評価される。

小石原さんはそれに満足をすることなく、そして日本国内にとどまることなく、世界へ打って出た。

イタリア、フランス、ベルギーと、小石原さんの旅は続く。パリの「ジャパンブランド・丹後テキスタイル展」に出演後は毎年出展を続け、ロンドンの大英博物館では「日英国交一五〇周年記念セブンション」に参加。藤糸入りのドレスを発表して高い評価を得た。

「全国や世界の人々に評価されるのはとてもありがたいし、うれしいのですが、やっぱりきもの産地で生まれ育っていますから、きものを着る人たちに喜んで使っていただきたいという思いはいつも胸の奥にあるんです」と小石原さん。その日は一日仕事にならなくなってしまうため、一般の人々が見学に訪れるのを嫌う工房も多い中、小石原さんはどんな人の見学でも(要予約)拒まずに多くの人に藤布の魅力と良さを伝え続けてきた。藤布の伝道師としてこれからも、その魅力を伝え続けていくのだろう。

